

君の名を。

奨励	工 藤 尚 子〔くどう・なおこ〕
奨励者紹介	同志社香里中学校・高等学校聖書科教諭 日本キリスト教団牧師

イエスはエリコに入り、町を通っておられた。そこにザアカイという人がいた。この人は徴税人の頭で、金持ちであった。イエスがどんな人か見ようとしたが、背が低かったので、群衆に遮られて見ることができなかった。それで、イエスを見るために、走って先回りし、いちじく桑の木に登った。そこを通り過ぎようとしておられたからである。イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。これを見た人たちは皆つぶやいた。「あの人は罪深い男のところに行って宿をとった。」しかし、ザアカイは立ち上がって、主に言った。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」イエスは言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」

(ルカによる福音書 19章 1―10節)

君の名を呼びたいのに呼べない日々

「君の名は」という映画のタイトルをもじって説教題をつけました。皆さんはどんな映画を思い浮かべましたか。数年前に大ヒットしたアニメーション映画でしょうか。それとも、古い作品で何度もリバイバルされている方の映画でしょうか。映画の内容は実際にご覧いただくとして、いずれにせよ「恋い慕う君の名を、呼びたいのに呼べない」というようなすれ違いが描かれたお話のようです。

私たちは今年、新型コロナウイルス感染症の拡大という目に見えない障壁に隔たれ、互いの名を呼び交わせない分断の中を過ごしてきました。「感染しても無症状のまま」というケースがあり得る。「これをすれば感染しない」という確実な方法が分からない。直接会わずにリモートで済ませたり、アクリル板やビニール越し、マスク越しにしかコミュニケーションができなかったり、距離を取り、できるだけ短時間で、余計なことはしゃべらないという気遣いをしたり。そんな「人と人との和やかなつながり」を蝕むのが、この病の厄介なところです。互いの名を呼び合い、互いに語らうような、健全な関係性から遠ざけられた私たちにとって、改めて「名を呼ぶ」ということについて考えてみたいと思いました。

松本五平の話

今週は「Doshisha Spirit Week」ということでお招きいただいています。「名を呼ぶ」ということについて、同志社の文脈の中で、印象的なお話を一つご紹介します。

若王子の同志社墓地を訪れたことがある方はどのくらいいらっしゃるでしょうか。同志社の創立者新島襄をはじめとして、新島八重、山本覚馬ほか、宣教師、同志社ゆかりの人々が葬られている墓地です。この同志社墓地の入り口横に、松本五平という人のお墓があります。松本五平は、初期の同志社において、用務員として働いていた人です。

松本五平は新島襄を尊敬し、洗礼を受け、死んでも新島襄の「墓守」として傍に仕えたいと願いました。同志社の学生たちから「五平、五平」と呼ばれて、からかわれていたという松本五平を、新島襄だけは「五平さん、用事をお願いします」と丁寧に接したのでした。このようなことを通じて、松本五平は新島襄を尊敬し、洗礼に至ったということです。

新島の死後も同志社で働いた松本五平は、自分の死を間近に控えた時、新島八重に「自分が死んだら、新島先生の墓の門の外に埋めてください。死んだ後も新島先生の門番をしたいです」と頼んだそうです。新島八重は「あなたが亡くなったら、門の外ではなく、内に葬りましょう」と約束しました。実際に松本五平の墓は、同志社墓地の門の内側すぐの所にあります。

「名」は単なるラベルではない

「名」というものは、他と識別、区別するラベリングの機能を持っています。ですが「名」というものは、もっと深遠な本質をも備えています。「名は体を表す」「名を挙げる」「名に傷をつける」などの慣用表現は、「名」が単なるラベルではなく「存在そのもの」「人格」に関わることを示しています。だからこそ、芸能人やスポーツ選手が、心機一転新しく歩み出したい時に名前を変えるわけです。

ことに「呼び名」、人から呼ばれる時の名前というものは、より深く人格に関わり、時には呼び名が人格に影響を及ぼすことさえあり得ます。ですから子どもが生まれる時には、その子にどんな人生を歩んで欲しいかという祈りを込めて、私たちは慎重に名付けをします。また、特定の間柄だけで呼び交わされる愛称が、互いの関係性をより深めてくれることもあります。逆に、侮辱的なあだ名を付けることで、相手を人格的に傷付けることもあります。「おい、お前」とか「出席番号何番の人」などと人を呼ぶことで、相手を一人の人間として尊重しない、相手を軽んじたり、「大勢の中の一人」としてしか認識していないことが、表れてくることもあります。

このように、「名を呼ぶ」ということは、単に人を区別するだけのものではないということが分かります。その呼び方は、相手との関係性を表します。名を呼ぶ時、私たちはその相手の存在を認め、深く受け入れ、愛に根差す関わりを願います。名を呼ぶことは、人と人との関係性の最初の一步であり、また完成形であると言えるのではないのでしょうか。だからこそ松本五平は、新島襄が自分の名前を「さん」付けて丁寧に呼んでくれることで、深い人格的交わりを感じ、死後もその傍にいたいことを願うほどになったのでしょうか。

「名を呼ぶ」という人格的交わり

本日はルカによる福音書をご一緒にお読みいただきました。ここでは、ザアカイという徴税人の頭が、イエスと出会って救われるという物語が描かれています。

徴税人というのは、当時イスラエル民族の社会において嫌われる職業の一つでした。支配国であるローマの手先であるかのように、同胞から税金を取り立てて異邦人に納める仕事を担う彼らは、宗教的にも汚れた存在と見なされました。ザアカイは、そんな徴税人の「頭」、リーダーであったというのですから、周囲の冷たい態度は推して知るべしといったところでです。

そんなザアカイのいる街を、イエスが通りかかります。ザアカイはイエスの姿を一目見ようと、木に登ったといいます。イエスと出会いたいけれども、名を呼ぶこともできない。でも切実にイエスとの接点を求める姿が描かれます。そんなザアカイに対しイエスは「ザアカイ、急いで降りてきなさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」と声をかけるのです。

イエスから名を呼ばれたザアカイはイエスと出会い、これまでの生き方を悔い改め、神に従って生きる新たな人生へと踏み出していきます。

実は「ザアカイ」という名前は、「清い人」とか、「正しい人」という意味です。日本の名前に置き換えるなら、「清さん」とか「正人さん」とかになるのでしょうか。「名は体を表す」ということわざを先ほど挙げましたが、汚れた罪人として人々から疎まれていた徴税人の頭が「ザアカイ」という名前であったのは、たいそう皮肉なことです。誰もザアカイのことを「清い人」とは捉えていなかったことでしょう。実際、イエスがザアカイの家に赴く時にも、人々は「どうしてイエスはあの罪深い男の家に宿をとるのか」とつぶやいています。「ザアカイなんかの家に」というのではなく、「罪深い男の家に」と記されているあたり、ザアカイの周囲には「名を呼ぶ」という関係性などなかったということが表れているようです。イエスはこの誰からも親しく呼び掛けてもらうことのなかったザアカイの名を、敢えて呼んでいるのです。

名を呼ばれること、名を呼ばれないこと

イエスがザアカイの名を呼んだことと、周囲の人々が「あの罪深い男」としか言及していないことは、対比として非常に興味深いものがあります。

新島襄が松本五平を「五平さん」と呼んだエピソードからも窺えるように、名を呼ぶ、その人の名を丁寧に呼ぶということは、その人との関係性を重んじる姿勢の表れであり、その人の人格を尊重していることのしるしだといえます。

それに対して、「名前を呼ばない」、「一人ひとりに名前があることを、敢えて認識しようとしない」という姿勢の中には、相手を取るに足らぬ者と軽んじている心の内が映し出されているのではないのでしょうか。

テニスの大坂なおみ選手が、全米オープンで特別なマスクを着けて出場していたことが、注目されました。黒人に対する人種差別や、警察の暴力による犠牲となった、7人の人物の名前が一人ずつ記されたマスクを、決勝までの全7試合、順に着けながら出場しました。

「Black Lives Matter」というスローガンもありますが、この「犠牲者の名前だけを記す」という静かな抗議のあり方は、心に響くものでありました。

無言のうちに、犠牲者たちの名前を呼んだ大坂選手。

ともすれば、「黒人」とひとくくりにされてしまう彼ら一人ひとりの名前を覚えて刻んだその姿には、彼らのことを忘れない、彼らの存在を「一人の死」として重く心に留め、その無念をないがしろにはしない、という決意が見えました。

人種だけに留まらず、差別の問題の根幹には、「誰かのことを名前のある一人の人間として見ない」という傲慢な姿勢があるのではないのでしょうか。

翻って、一人ひとりの名を呼ぶという行為は、相手との人格的な出会いや、関係性の構築を目指す、希望に繋がるものでありましょう。

一人ひとりの名前を呼ぶ

私は日頃、中学校・高等学校という場所に身を置いて働く者の一人ですが、学校という現場でも、個人ではなく集団で、人格ではなく属性で、人を見てしまう落とし穴が、しばしばあります。

今年の何年生はこうだ。何組の生徒たちはこうだ。何々部の部員たちがこうだ。男子が。女子が。成績不振者が。

一方、新島襄は有名なこんな言葉を残しています。「諸君よ、人一人は大切なり。一人は大切なり」（同志社編 『新島襄 宗教論集』 岩波書店 2010年 112頁）。

ご存じの方も多いように、これは退学していった学生を思っただけで涙ながらに語られた言葉です。「けしからん学生たち」「自業自得の退学者」という括りではなく、その一人ひとりを思ったからこそ絞り出された言葉であろうと思います。

呼び合おう、「君の名を。」

ザアカイはイエスに呼び掛けられたことで、その生き方が大きく転換しました。ザアカイという名に沿った、神に従う清い人を志す、そんな生き方へと踏み出したのです。誰かから親しく名を呼ばれることもなく、その人格的な存在を軽視されてきたザアカイ。呼ばれずにいた誰かの名を呼ぶ、ということは、その人にとって大きな、生きる力となり得ることなのかもしれません。

マスク越しであっても、アクリル板越しであっても、時にパソコンのディスプレイ越しであっても、「そこにいる、他でもない、あなた」の名を呼ぶということを大切にしたいと思います。名を呼ぶことから始まる温かな交わりを求めたいと思います。また、世において名を奪われ、名を呼ばれずにいる人たちに目を留め、そこにいる一人ひとりの名を尋ねる、そんな眼差しをもっていきたいと願います。

まずは今日、お帰りにになったら、久しく呼んでいなかった大切な誰かの名前を思い出して、連絡を取ってみませんか。

身近な一人ひとりが大切にされること、私たちが大切に友の名を呼ぶこと。そこからやがて、神の国が実現していくものと信じています。

2020年10月27日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録